

(……ああ、もう。どうして健康診断って、こんなに落ち着かないんだろう)

年に一度の、義務的な社内健康診断。

普段は会議室として使われている広い空間が、今日だけは無機質な白いついたてで細かく区切られ、臨時の検診会場へと様変わりしていた。あちこちから聞こえてくる、医療器具を触っている音と、看護師さん達の事務的で抑揚のない声。

私は硬いパイプ椅子に座り、自分の順番を待つ間、手元のバインダーに挟まれた問診票を何度も何度も見返していた。

「はあ……」

体重、視力、聴力。これらはいつも通り。血圧も特に問題は指摘されなかった。

それなのに、どうしてか看護師の一人がやってきて、困った顔でそう言われた。

「少し気になるところがあるそうなので、内科問診に行ってくださいますか？」

「内科問診、ですか……？」

「はい。この会議室からは出ていただいて、2階の医務室に行ってください。お渡しするバインダーに案内図も入れておきますので」

バインダーの案内図に従って、私は会議室を出て、指定された場所へと向かった。今回の検診用の簡易的な部屋とは違い、社内にあるしっかりとした医務室だ。

特に病気や体調不良もなく過ごしてきた私とは、無縁なはずの場所だった。

（深呼吸、深呼吸……。大丈夫、落ち着いて。ただの問診なんだから、すぐに終わるはず）

もともと、私はお医者さんという存在が苦手だった。あの独特の消毒液が鼻を突く匂いや、汚れ一つない無機質な白い壁。自分の身体を正常か異常かど

うかと、観察される行為にとっても緊張してしまうのだった。

(でも入らないと……)

私は重い足取りで2階へと向かい、医務室のドアの前に立った。扉の前に立つと、緊張で心臓がまた少し、騒がしく脈打ち始めた。

「失礼します」

ドアをノックして中に入ると、外の世界が嘘のように遠のいた。

部屋の中はわずかに漂う清潔な石鹸のような香りと、控えめな消毒液の匂い。緊張で早まる私の鼓動が、静寂の中でやけに大きく響いている気がした。

やがて、目の前に座る男性がゆっくりと顔を上げた。

「……失礼しました。産業医の遠山冬琉です」

銀縁の眼鏡の奥から、穏やかで知的な瞳が私を捉えた。私はその顔を間近に見て、思わず息を呑んだ。

（うわっ……。イケメン、だ……）

透き通るような白い肌は、窓から差し込むわずかな光を吸い込んで、内側から発光しているかのように瑞々しい。すっと通った高い鼻筋、そして芸術品のように美しいラインを描く顎の輪郭。形の良い唇は、知的な冷ややかさを湛えながらも、どこか柔らかな色香を纏っている。

特に印象的だったのは、その長い睫毛に縁取られた瞳だ。深い湖の底を思わせるような、静かで、それでいて吸い込まれそうなほど純粋な輝き。銀縁のフレームが彼の端正な顔立ちをより一層引き立て、高潔で、どこか神秘的な雰囲気醸し出していた。

（そ、そういえば社内の先輩達が体調が悪くなったから、ちょっとだけウキウキしてたっけ……。もしか

して、これって、先生のせい……？)

惚けたように先生を見る私の視線に気づいた彼は、口角だけを少しあげ、笑みを浮かべた。

「……顔色が少し赤いようですが、体調は大丈夫ですか？」

「……あ！ は、はい。すみません、あの……」

私は喉まで出かかった「先生があまりにイケメンだったので」という言葉を、必死に飲み込んだ。

「そうですか。緊張されているようですね。リラックスしてください。これから、あなたの身体を、丁寧に診ていきますから」

先生の瞳が、ふと優しく細められた。その眼差しに包まれるだけで、心臓がドクンと高鳴る。

「では基本的な数値を確認しますので、看護師から

渡されたバインダーをこちらに」

「あ、は、はい」

バインダーを渡すと、先生はそれをじっくり眺めながら、手元のタブレットを指でスライドしつつ、データをじっくりと眺めていた。

「なるほど。心拍数の数値の波形に、ほんの僅かな乱れが見受けられるようですね。機械による一時的な誤診の可能性もありますが、念のため詳しく確認しておきましょう」

「え、心拍数のところでですか……。それって、私大丈夫なんでしょうか……」

「そう不安がらないでください。精密な機器で測り直せば、はっきりしますから」

冬琉先生はそう言って、デスクの横にあるベッドの方を指し示した。

「では、そちらのベッドに横になってください」

指差されたベッドの側には、モニターが繋がった複雑そうな測定器が置かれている。

「正確な測定のために、上のシャツを脱いで、下着も外していただけますか？」

「えっ……！？ あ、あの、脱がないといけないんですか……？」

「はい。今回は誤診かもしれませんが、数値の乱れがありますので、しっかり確認しましょう。その方があなたも安心できますよね？」

「そ、そう、ですね……」

（た、確かに服を着て測って数値がおかしくなっちゃったなら、二回目は脱いだ方が正確かもしれない……。でも、脱ぐってことは、おっぱい見られちゃうよね……）

思わず胸元を隠すように腕を組むと、冬琉先生は眼鏡の奥の瞳を少しだけ和らげ、優しく微笑んだ。

「大丈夫ですよ。これは医学的な処置ですから。カ

ーテンも閉めてありますし、ここには私とあなたの二人しかいません。……リラックスしてください」

先生の有無を言わせない響きを持った声に、私は抗えない魔力のようなものを感じて、震える手でゆっくりとブラウスのボタンに指をかけた。

ぷちっ、ぷちっと、静かな診察室にボタンの外れる小さな音が響く。

「……あ、……っ……」

（脱がなきゃ。検診のためだし……。でも、先生におっぱい見られちゃうなんて、恥ずかしい、……恥ずかしいよお……っ）

一つ外すごとに、診察室のひんやりとした空気が肌に触れて、熱を持った私の身体を冷やしていく。でもそれ以上に先生の、眼鏡の奥にある鋭い視線が、私の指先の動きをじっと追っているのがわかって、胸がドキドキとした。



「下着も、外してください。電極を正確な位置に貼るためには、遮るものがない方がいいので」「は、はい……」

私は消え入りそうな声で返事をする、背中に手を回して、ブラのホックを外した。ぱちんっと、最後の手掛かりが解ける感覚。そしてゆっくりと、ブラの肩紐を滑らせていく。隠していた肌が露わになり、私の柔らかなおっぱいが、先生の目の前にさらけ出された。

「……っ、ん、……っ♡」

（あ、ああ。ブラまで、脱いじゃった。先生の、目の前で……♡）

先生の視線が、私の喉元から、鎖骨。そしておっぱいから、先端の乳首へとゆっくり、這うように動いていく。視線だけで、直接肌を撫で回されているような、そんな生々しい感覚になって、私は誤魔化すようにして先生の名前を呼んだ。

「あ、あのっ！ 遠山先生。ぬ、脱ぎ終わり、ました……」

「ああ、そうですね。ではベッドに横になってください」

「は、はい……」

私は恥ずかしさで顔を伏せながら、促されるままにベッドへと横たわった。

「では吸着式の電極を付けていきます」

冬琉先生の、白く細い指先が私の肌に触れる。その指は驚くほど熱くて、触れられた場所から波紋のように鳥肌が立っていくのが分かった。

「……ひ、あ……っ！」

（先生の、指がおっぱいスレスレを触ってくる……！）

「すみません、冷たいとは思いますが、なるべく動かないでください。正確な位置に貼る必要があります